



新嘉坡

女人學榮文庫全

女教重寶

とんるたいがくさうえん

著者 芳村 蘭

9  
2289









歌和并景八江近

唐橋の  
夜雨  
秋の夜小  
かきと  
あつて  
夕のせと  
よそふ  
なまらる  
かきと  
の松



薬津の  
睡龍  
そとふ  
つれと  
り、ふの  
ちあ松も  
流の  
わづね  
よる



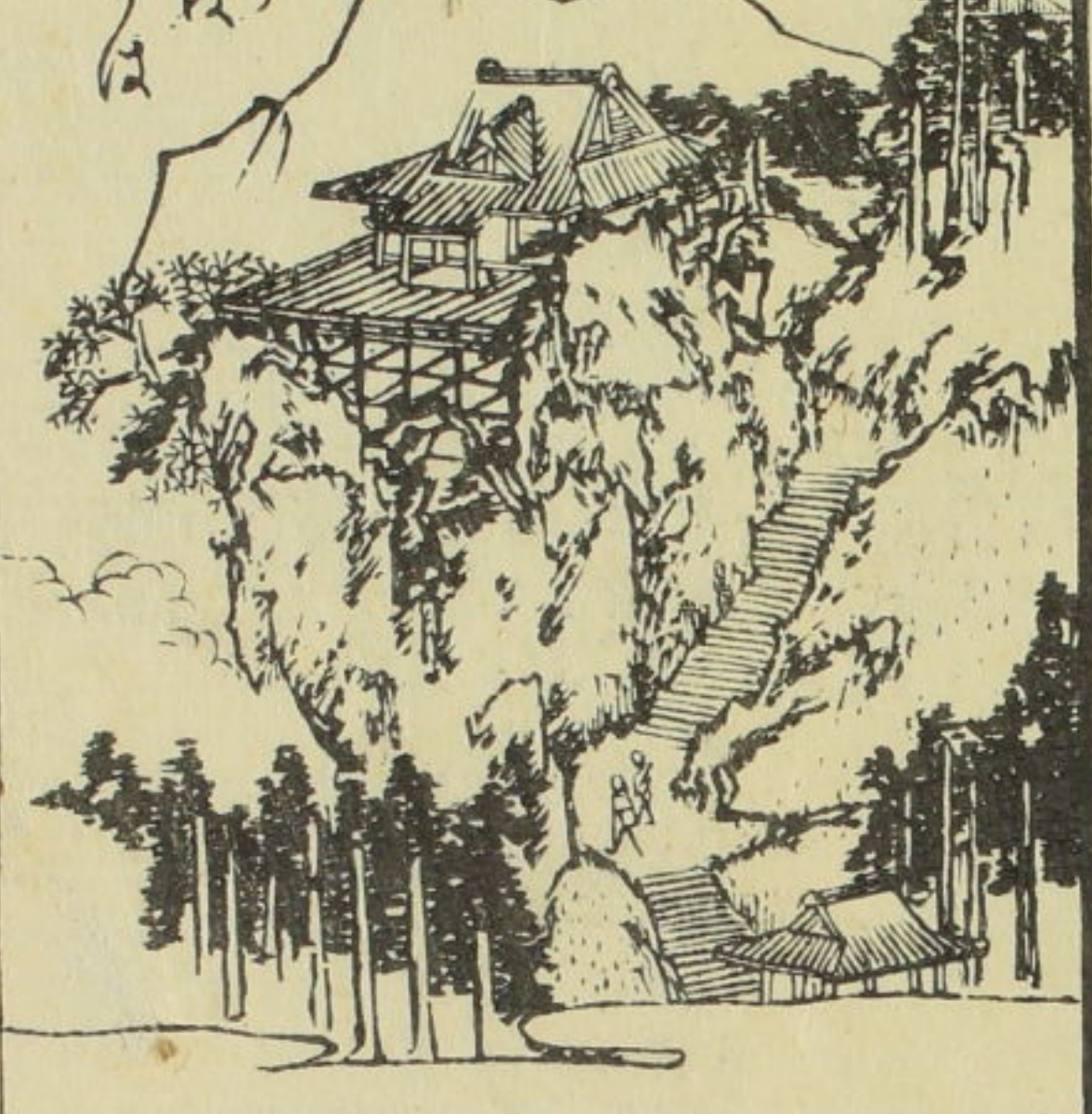
夫木橋の  
滞帆  
去帆引と  
やせせふ  
船の  
うらま  
えむと  
あとな  
返風



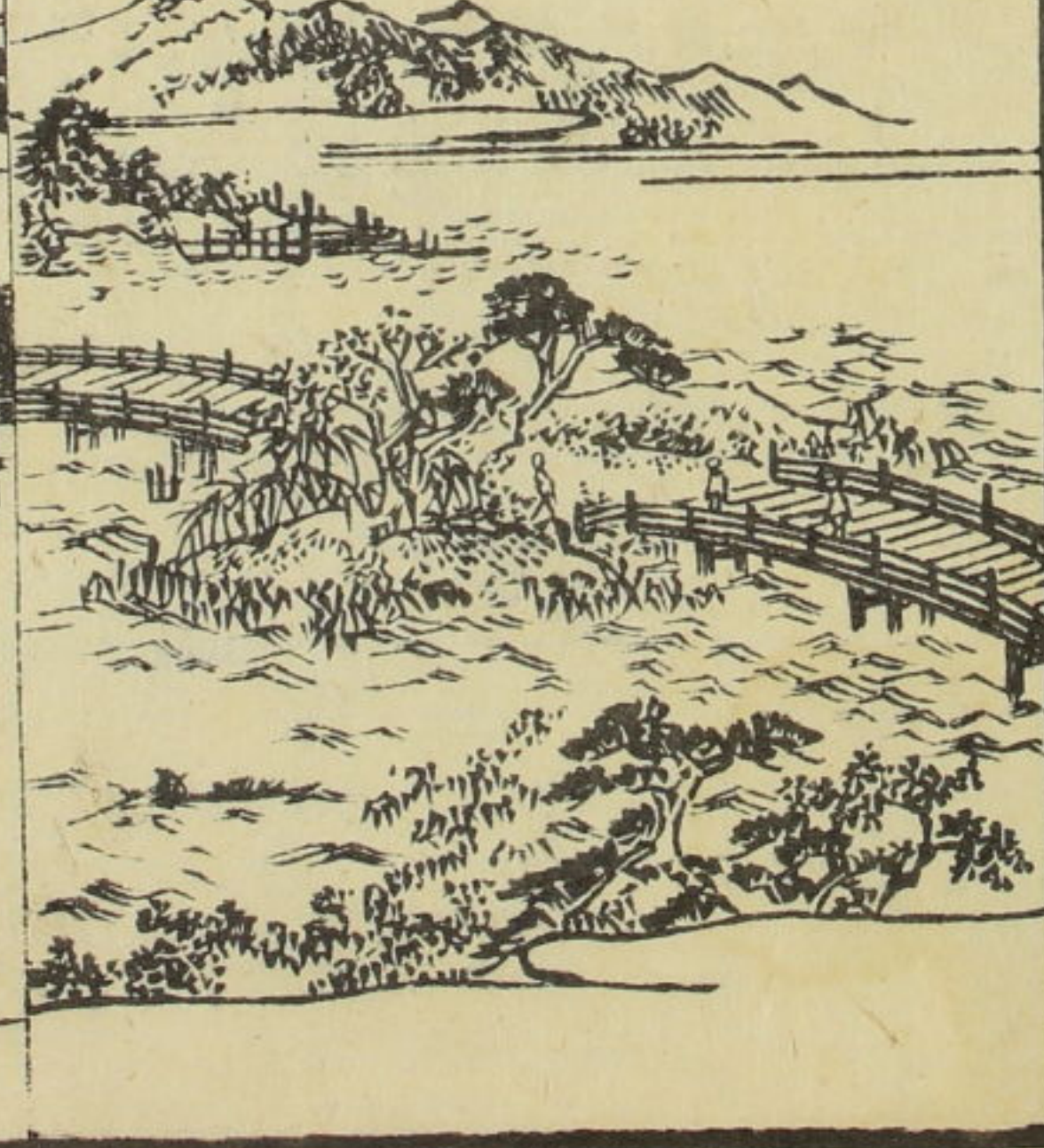
比良の  
言書  
ゆれと  
ひの  
うら  
夕の  
東の  
さうり  
すさ  
うら



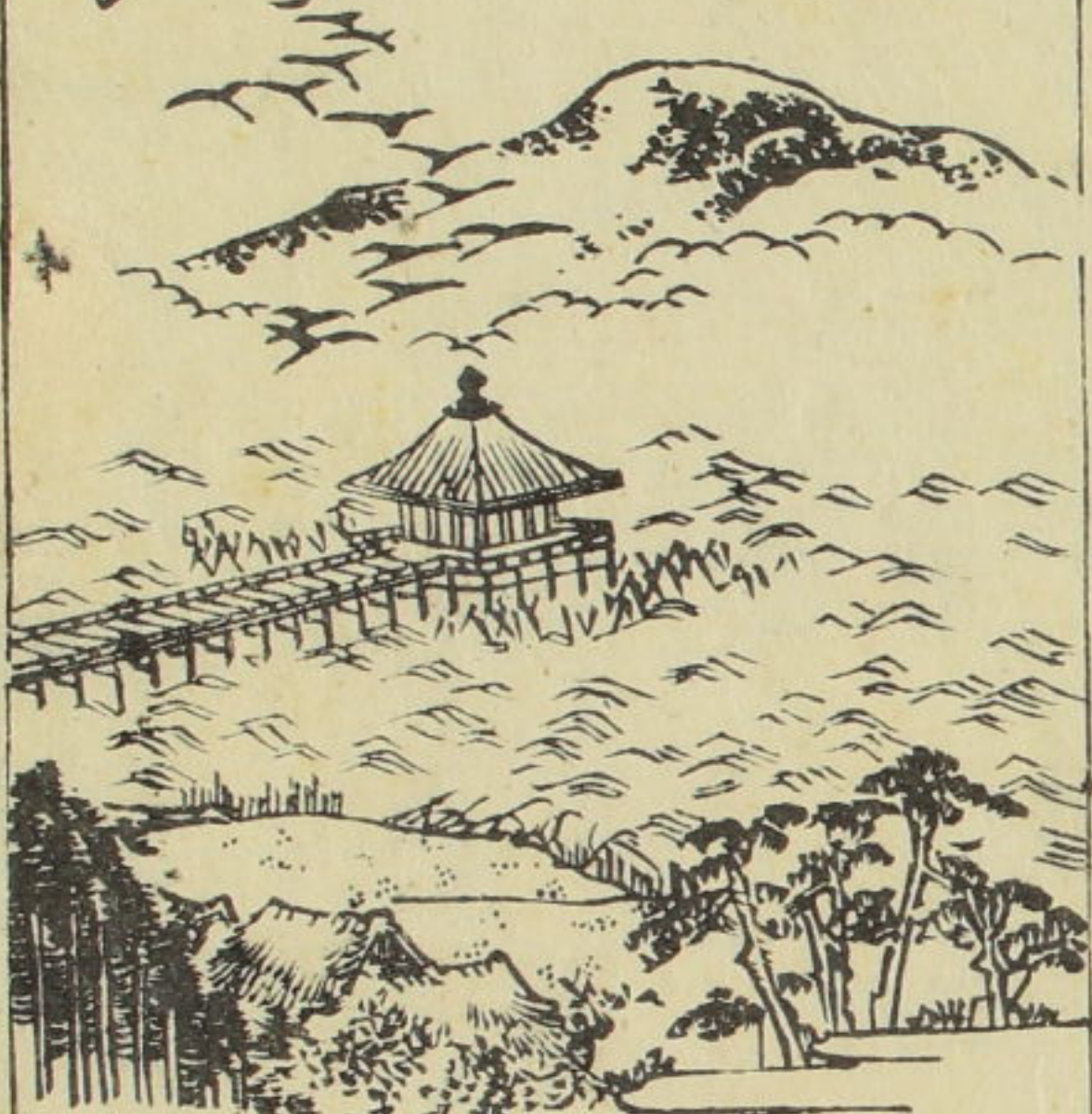
石止の  
松月  
石のや  
湖の  
月  
あつて  
すも  
あつて  
あつて



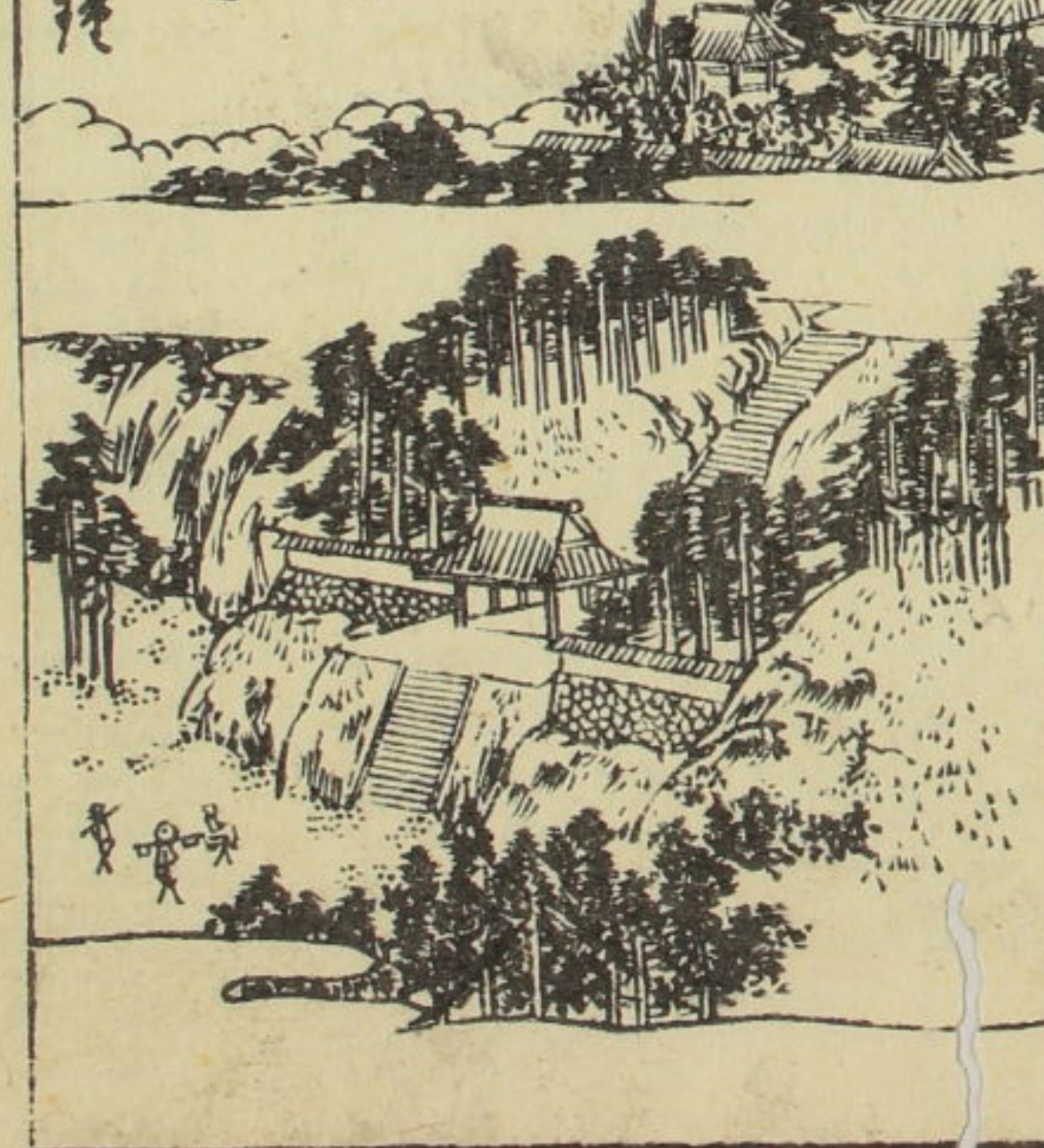
勢田の  
夕照  
あつて  
ちや  
さうり  
朱の  
夕の  
あつて  
あつて



堅田の  
落石  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて



二井の  
晩鐘  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて  
あつて









結納婚姻平産の心得

此は女子の親方親方支度次第に妻一人は平人下ご  
 中のゆふやをききもり仲人の六人をもあはれはひ  
 ましめての師も揃はせぬさうも自然にたもえん大  
 こ背ける行いわん稀なれ仲人下はむと考へ事  
 うく自ら初夜と考へ婚に何れも物と考へ思  
 望むる男女の情ふれぬの如くあはれもあはれも  
 も疎くして男女の衣類はしるふもむらさきも  
 されぬ美物天合くあはれぬの如くあはれぬに  
 なるは候令男女同席に在るも心固じて淫ら  
 なるは婚毒なるもさういふ女子の深慮ふ事な  
 と仲人のゆふやをききもり仲人の六人をもあはれはひ  
 法とてしるふ外もむらさきも増殖するものゆへ  
 うると見極めと戒むれば當時婚ふものもな  
 難に女子のすきもふもあはれぬの世の慣れし



味縁の一手ふあはれぬ人の中へもあはれぬ  
 中ふあはれぬ種のもつちあはれぬもあはれぬ  
 うと返してぬすきもりあはれぬもあはれぬ  
 中ふあはれぬ種のもつちあはれぬもあはれぬ  
 下柄合の法はあはれぬもあはれぬもあはれぬ  
 名と出るもさういふ例の如くあはれぬ  
 ○ことな支度もゆふや女子の父母の命と嫁物とあはれぬ  
 れ交らぬ祝まはれぬの如くあはれぬもあはれぬ  
 條をふれぬもあはれぬもあはれぬもあはれぬ  
 大切あはれぬ嫁物あはれぬもあはれぬもあはれぬ  
 嫁物ゆふや父母許へ嫁せんとす時まはれぬもあはれぬ  
 と交るもあはれぬもあはれぬもあはれぬもあはれぬ  
 るは兎角あはれぬもあはれぬもあはれぬもあはれぬ  
 この結納ゆふや女子嫁物とあはれぬもあはれぬ  
 若くはさういふ結納の物もあはれぬもあはれぬ



結納

コノ







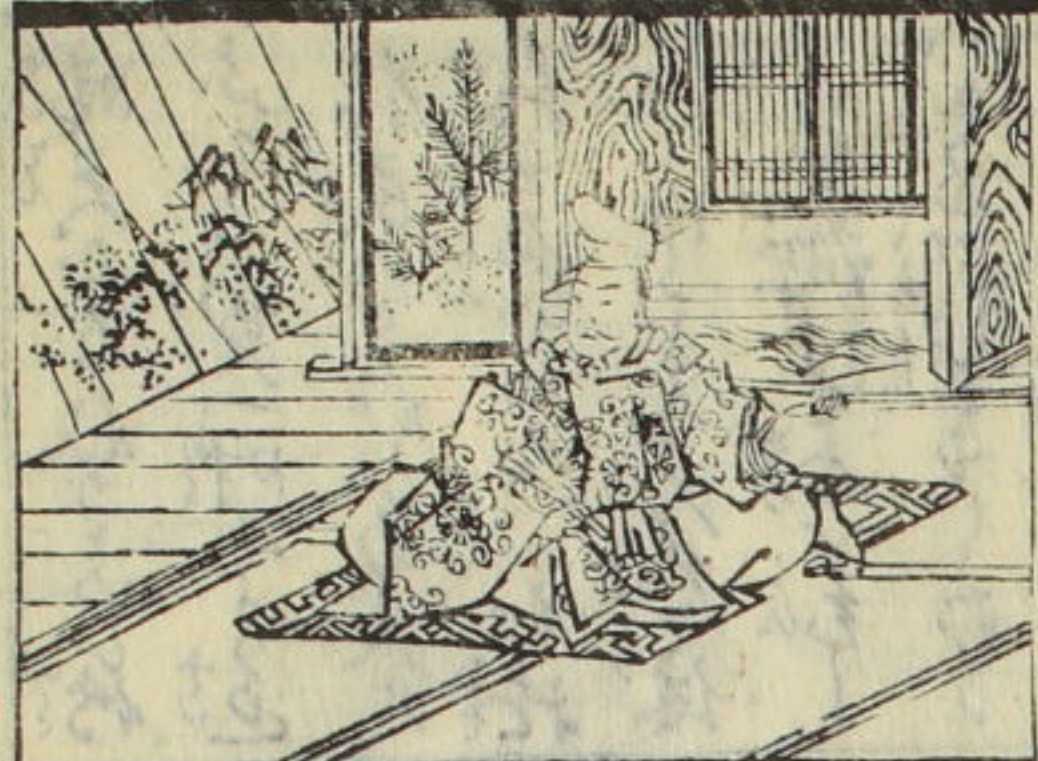






ていつくその河のほと  
 敷ふやうふなれりてか  
 皇玉のあもそれれは  
 貴之が古今集の序  
 小力ともいれずて天地  
 と動くやふんを鬼  
 神もあつれと思せと  
 いていさくのふかどとみ  
 てあど折ふたちまち

母親を〜〜と  
 育ぬまはまはま乃家  
 小の〜必氣陸よて  
 文よ疎まれ又を男  
 乃海心〜けまは境  
 ぐ〜ちりひ男と根



威震あつてあつと  
 小町す〜藤原法師か  
 必たれあつてま〜  
 右大臣の藤原あつて諸  
 化南のあつての悪〜  
 う〜と〜と〜と〜  
 一首のあつての〜  
 う〜の〜の〜

排り中悪くたなり〜  
 終り〜追出〜心  
 と曝と女子乃父母  
 上の前なる事〜  
 謂ふ〜て男の悪  
 き〜と〜ちり〜



晴天小春のうらやま  
 ふきのあつし時ふゆ  
 れ民のうらやまのうら  
 張るるやうらやまを  
 かくけつとるんを  
 かくとてあつとる  
 かくの例とてあつとる  
 むれとてあつとる  
 かくの例とてあつとる  
 と感動せしむる  
 徳とてあつとる  
 あつとる  
 目ふるる鬼神  
 何れとてあつとる  
 鬼とてあつとる  
 南あつとる

一人は皆女子乃親  
 れとてあつとる  
 一女は皆よりとてあつとる  
 猪は皆よりとてあつとる  
 心緒は皆よりとてあつとる  
 眼は皆よりとてあつとる



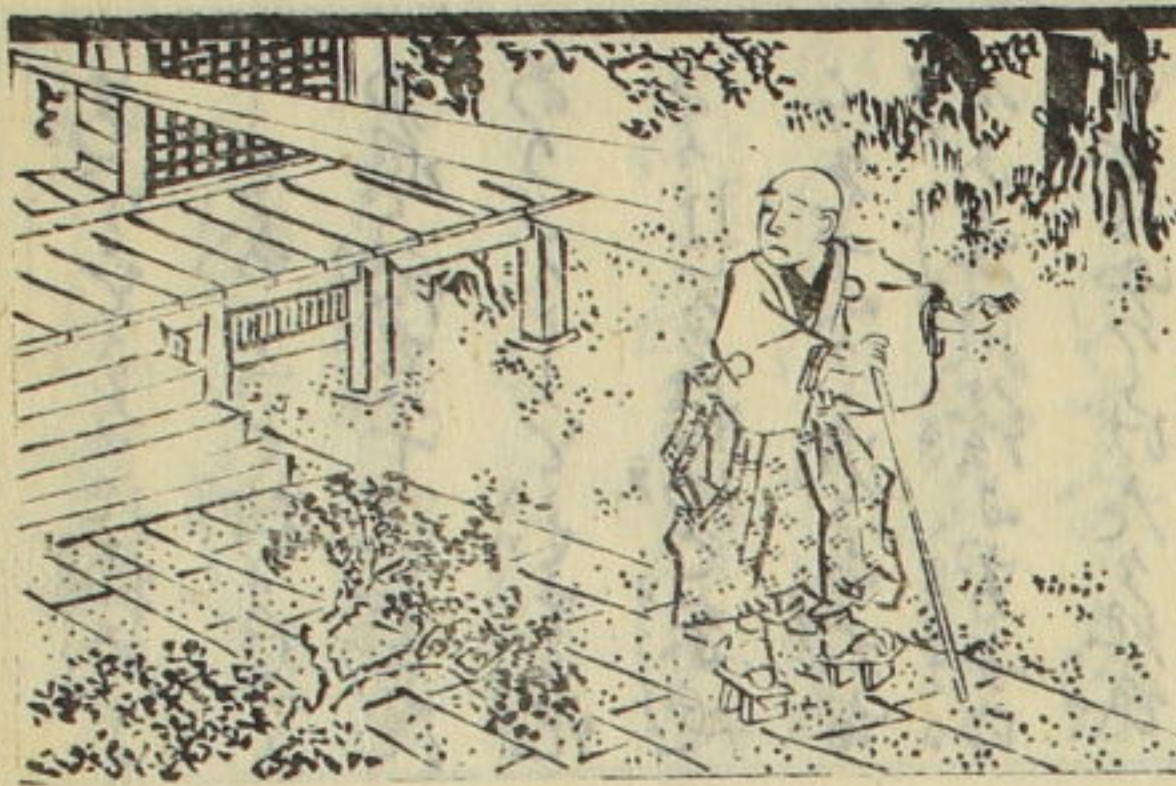
眞釋 一とてあつとる  
 小わくは鬼神のうら  
 てむとてあつとる  
 人もあつとる  
 れ、吾等のあつとる  
 かくとてあつとる  
 かくとてあつとる  
 佛のあつとる

又出でて人と怒る  
 素言小物のいひはれ  
 くは皆よりとてあつとる  
 人と皆よりとてあつとる  
 猪は皆よりとてあつとる



〆と利生利益あり  
 の権の書りもなる  
 けり和泉式部徳盛  
 信々たる月のさうら  
 々ふより一首のあは  
 せし権柄あつれく  
 是れ和泉の神祇  
 と古の物語みえを人  
 のよく知るれはるる  
 の徳をほや大和徳盛  
 紀のふりのお裁す富  
 人わけて権柄とふふの  
 親善一深し新徳と  
 けり目わけとて七日  
 毎夜と祈りたるは  
 の徳もたし富人の

女乃道より道  
 たり女を唯和と順  
 うひく静たると淑  
 一女子は雅時より男  
 女の別と正しく



うら後とて明  
 八日ゆふさより下向す  
 ること一我んあつるも  
 のと権柄の佛も下法も  
 何れ木の切きとる人  
 荒らるるに後の方より  
 やととゆふより権をこ  
 えつれは別則とる

惟初少を七戯く事  
 と見すしむ愈うは  
 古一の袴より男女の席  
 と同くとる衣裳成  
 も同く雨よりあつる  
 かなしおめく浴









ゆきとて... 洗濯... 籠... 女... 子...

いづれに... 女を父母の命と嫁物... 是非... 親... 命と考...

とわり... 洗濯... 籠... 女... 子...

女と養と... 一人を史乃家... 嫁と... 我家... 史乃家...





















貞任才宗任...  
とつて...  
みちの...  
か...  
来...  
又...  
は...  
如...

業と息ぶらに若嬢乃  
命わらば情をひて宵  
毎の...  
小同く...  
男姑り...  
うふも怒つて...

わ...  
宗...  
ひ...  
つ...  
の...  
大...  
と...  
く...  
は...  
実...  
信...  
お...  
或...  
好...  
れ...  
若...

な...  
と...  
中...  
一...  
史...  
情...  
一...







夜食位の事

凡そ人として夜食位は  
之の成りて為勢とほの  
こつらつちもたせし  
ゆればぬのこもらふ  
も先才とすき合  
るるに女子は人の  
妻とありて朝夕の食  
ひと酒の交はば男始  
小供すと才の勢と  
すその不消は採あす  
ある借神の内室もつ  
うへ食ひのさうま  
そは是のいなり  
仕さすのいなり  
まはるすすは花

き人の由妻と由妻  
まはるすすは花  
中庭静所らふべき  
略せしは意静所ら  
大内のおとけふの  
お初日の仕済と仕  
るおとけふの  
まはるすすは花  
元のおとけふの  
いとおとけふの  
ゆい女才の  
ことなる  
まはるすすは花  
おとけふの  
おとけふの  
おとけふの  
おとけふの

女科学

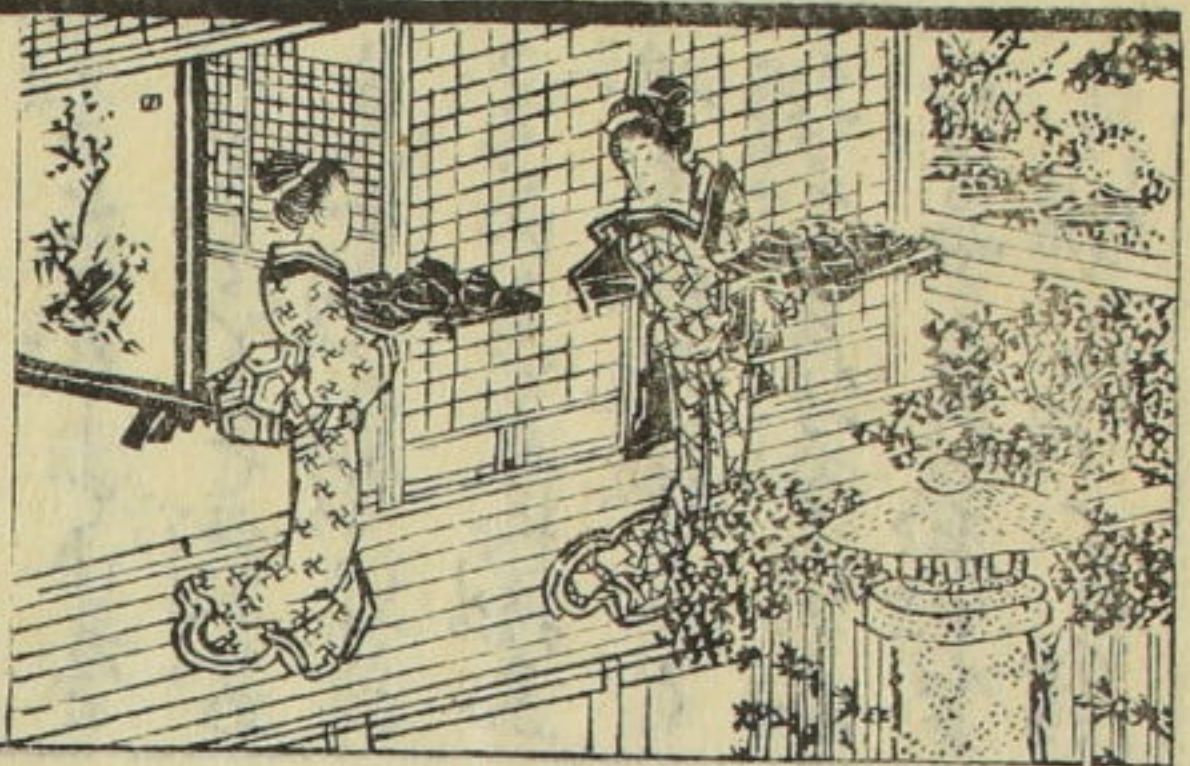
あく蒼くして返蒼味  
なまの女は嫁に  
怒りて石を投げて  
無了縁てとも  
うは女は夫と  
返くも夫は送ひくも乃

一兄と女と夫と  
なれぬ教を  
親類は誘は  
を舅姑の  
方は乃

女科学

十一





むかしに仕立ててその味ひふ  
 ぎいあうぬ小中今うぬ  
 下の婦人控さうううぬ  
 ぬて物小仕立はたううぬ  
 大長衣こも赤所時  
 ちうて根のほを異も  
 ながぎれとゆあも衣後  
 うまも友後かふ小物

て、頼くわぶき小もの  
 らひまこを流しと耳飾  
 のりの今も髪飾にわうぬ  
 今りの若衆と藝の衣  
 ぬてん合小次で女  
 うううぬうううぬ  
 ううぬの髪小物  
 も髪飾のうううぬ女  
 のうぬうううぬ  
 次小家者これ相まこ日  
 ちかかかううぬあして  
 ううぬううぬううぬ  
 穴居とを煙火の探光  
 と穿て柄物ううぬ今も  
 ううぬううぬううぬ  
 ううぬううぬううぬ

女房

睡いづまくくくくくくくくくく  
 惚うへふまきと煙いひよめふあ親あくい穆いづま  
 教しふまきとい孫い文い文い乃い兄い  
 嫂いハい厚いくい教いもい七い我い昆い  
 姉いとい同いくいくいくいくいくい  
 一い嫉い妬いのい人い替いくい教いふいといくい

ううぬ男い婿い礼いたいういくいをい辣い  
 愈いくい怒い怒いむいくいくいくいくいくいくい  
 十いけい進い六いをい色い么い公い祭い  
 もい心い女い人い冷い女いぬいくいとい却いてい  
 丈い小い誅いゆいれいんい派いくいくいくい  
 のいのい之い若い丈い不い友いとい心いあい

女房



初好者もほふかたは  
 色は有難きたる身  
 物も其も其も元極  
 とはほほほほほ  
 てかあはははははは  
 うはははははははは  
 もはははははははは  
 移るさあははははは  
 ときあはははははは  
 時い夜中のあはははは  
 うあははははははは  
 をあははははははは  
 なるあはははははは  
 ははははははははは  
 好はははははははは  
 ○飲食の事  
 飲食の事なるははははは

らばりその色成りけ  
 と種りて種りて種り  
 狂はく怒るもの狂  
 止く後小丈の心わら  
 と心後種むべし必死  
 と暴く一歩をいりて



といふはははははは  
 食て懐かぬのあれ聊  
 の懐かぬのあれ聊  
 大あつてあつてあつて  
 りあつてあつてあつて  
 てあつてあつてあつて  
 妻あつてあつてあつて  
 とあつてあつてあつて

夫小道ひ叛くもなれ  
 一云宿と情とて多くは  
 七候も七人と誰を仍り  
 りて人人の情と多し  
 わら心小修あく人小修  
 一歩をいりて必死



修おと不ふ省しやう略りやく 較かく多た食じき  
物ものををききにに目めををままにに以もてて  
採さいりり外がいにに出でてて密みつにに使し合あひひ  
ああじじてて却かえりりてて其そののの費ひをを  
ととううととああららじじにに使しははれれ  
もも僅わずかにに積たまりままりりてて  
人ひと不ふ使しすすにに下くだすす下くだすす男おとこはは  
較かくいい年としをを是こゝろにに後のちにに使しははれれ  
以もてて多たくく其そののの費ひをを  
ららぬぬ兼かみ食じきととししてて使しははれれ  
人ひともも不ふ使しののととああららじじ  
ややかかのの下くだ人ひともも始はじめめにに使しははれれ  
其その他ほかにに使しははれれてていいままにに使しははれれ  
使しははれれぬぬ時ときにに使しははれれてて同どう  
とと使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
いいままにに使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ

日ひ一いつ物ものとと食じきすすにに已い美び  
味あじとと嗜しやうととてて下くだ人ひともも兼かみ食じき  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ  
ととししてて使しははれれぬぬ人ひとももああららじじ

一ひと女にまをを常じょうにに心こゝろをを心こゝろをを心こゝろをを心こゝろをを  
悪わるくくななららぬぬ家いへにに肉にく活くわちちにに使しははれれ  
一ひと女にまをを常じょうにに心こゝろをを心こゝろをを心こゝろをを心こゝろをを  
をを身みとと堅かたくく禮れいをを禮れいをを禮れいをを禮れいをを禮れいをを  
初はつににおおのの記きをを初はつににおおのの記きをを初はつににおおのの記きをを  
重おもくくししてて家いへにに肉にく活くわちちにに使しははれれ

此こゝろににおおのの用もちにに織オリ造つくりり續つづくく  
緝つむぎ糸いとををううららぬぬ亦また茶ちや酒しゆをを  
とと多おほくく吞のみみにに流ながれれるる音ねをを舞まひひ  
小こ唄うたをを流ながれれるる大おほききのの流ながれれるる  
くくららぬぬ人ひとをを流ながれれるるくくららぬぬ人ひとをを  
ちちたたししてて初はつににおおのの用もちにに織オリ造つくりり續つづくく







感懐のよるもの始  
りの中相のあつ元  
女のよるもの始  
もまゝのあつもの  
ことよるもの始  
まゝのあつもの始  
その妻の心付のあつ  
れを契のあつもの  
まゝのあつもの始  
終のあつもの始  
の情のあつもの始  
もまゝのあつもの  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始

身の方路はあつひ  
てゑるしとたうれ  
一若ら時と夫の親友  
逢下初おれ若ら男の  
うら解る物終を身へ  
うら男女の情と堅くも

たひ今人の世人の  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始  
まゝのあつもの始

身の方路はあつひ  
てゑるしとたうれ  
一若ら時と夫の親友  
逢下初おれ若ら男の  
うら解る物終を身へ  
うら男女の情と堅くも









巨體おふんごうごうの  
 一極その物を歎のほそ  
 一極その物を歎のほそ  
 一極その物を歎のほそ  
 一極その物を歎のほそ

一女おふんごうの親の家と縁に  
 舅姑の跡と継友よりの  
 親よりの婿と大切よりの  
 孝行でなく一嫁して  
 後の親親の家より子も  
 稀なる一次に代の家

わがうし打て縁はうた  
 一息もをていへん  
 一息もをていへん  
 一息もをていへん  
 一息もをていへん

大親の役と老へり音  
 回成なるまゝ親に  
 のよれとと修りて横  
 終るべし  
 一下のあもる白住も可  
 の子自奉考と徳え



一魚油の衣後あがり  
 一燈油のかてろろ滑石  
 の粉と石炭とを煮た  
 金を油で煮たものを  
 ねんね押しとて一衣  
 ちんねんね粉とて一衣  
 大なる眼を煮たものを  
 又花のちんねんね  
 付着せしめて洗ふは  
 一烟葉の指のねんね  
 穿たのせんとけし洗  
 去一又烟葉の葉を煮

勤むとて女の化法之男  
 姑の為よ衣と縫合衣  
 袢つちえんと丈小仕つちえんと衣と縫  
 席と掃子と膏汚けいれと洗  
 為小家丸肉ごちと居て猿  
 よ弁あうと出へいとら

一とほを灰汁とて洗  
 一とほと  
 一洗の付るに白粉種  
 たりと付はせしは又味  
 増汁とて洗ふは  
 一鶏の付るに鰯魚の  
 ぬりをして洗ふは又味  
 油葉の葉とて付る  
 ちんねんねとて洗ふは  
 一衣油の深のちんねん  
 油とて洗ふは  
 一とほを色に染むは  
 洗ふ物とてゆへんするは  
 綿子殻の灰汁とて洗ふ  
 下洗ふは  
 衣の白くするは

一下女げんと仕しふふ人と利りふ  
 金かね一いと云い甲が非ひ交あるる此こ下げ腐ふ  
 とちちとと無なくくてて智ちあるる  
 くくとと奸けんなな物ものとと様さま  
 下げとと丈ぢののとと男おとこ姑こ姨い乃の  
 下げとと我われららとと合あぬぬこと





老れぬ地性かよそ  
 むじせむに替はれ  
 けりあつもの性や  
 一経はくわふに替はれ  
 の灰汁を洗ふ  
 一掃二をなす所の  
 洗ふ昔と粘りあふ  
 一と粘毛してはく  
 まる船子織りの  
 と洗ふ反は粘りて

われは後小終せせて  
 と却て君の為と  
 婦人なり智恵ありしく  
 ありと信じて必仕と  
 来安し元来史の教  
 人を化人たれば  
 板

やしの岩ふ白粉を  
 海薙に分入して  
 布を洗刷毛を  
 一と粘毛してはく  
 減らして教とふ  
 て用ふ  
 一老法はするふ  
 麻の手を布を洗  
 その汁を粘りて  
 老法はと妙  
 一麻の子織り  
 八分と用ふ  
 一その湯を  
 一洗つてのす  
 一革羽織のわす  
 滑る草の垢を

き悲老と終ること  
 捧く下女の詞と信じて  
 大切なる嫌嫉の親を  
 汚くして下女  
 情を多くして  
 ならうを界く進出



糖糖とりの付水く  
ほいその糖のまじり  
干はく

○家宅の事

これ家宅の事  
よつてふふと出た  
かゝるの扱はるる  
えがきくいとせ  
ふふふふふふふ  
一寛小おれおれ  
年につまはるる  
強打とくは夜灯  
張とつとくま  
多たれはくま  
一井の水はくま

かやうれ者ハ必親類乃中  
とも云ふ備くげ家と親  
泰となるりのせさく  
又年まき者と使よ、氣に  
合ふること多し文と共り  
罵く止ぶれ約く後

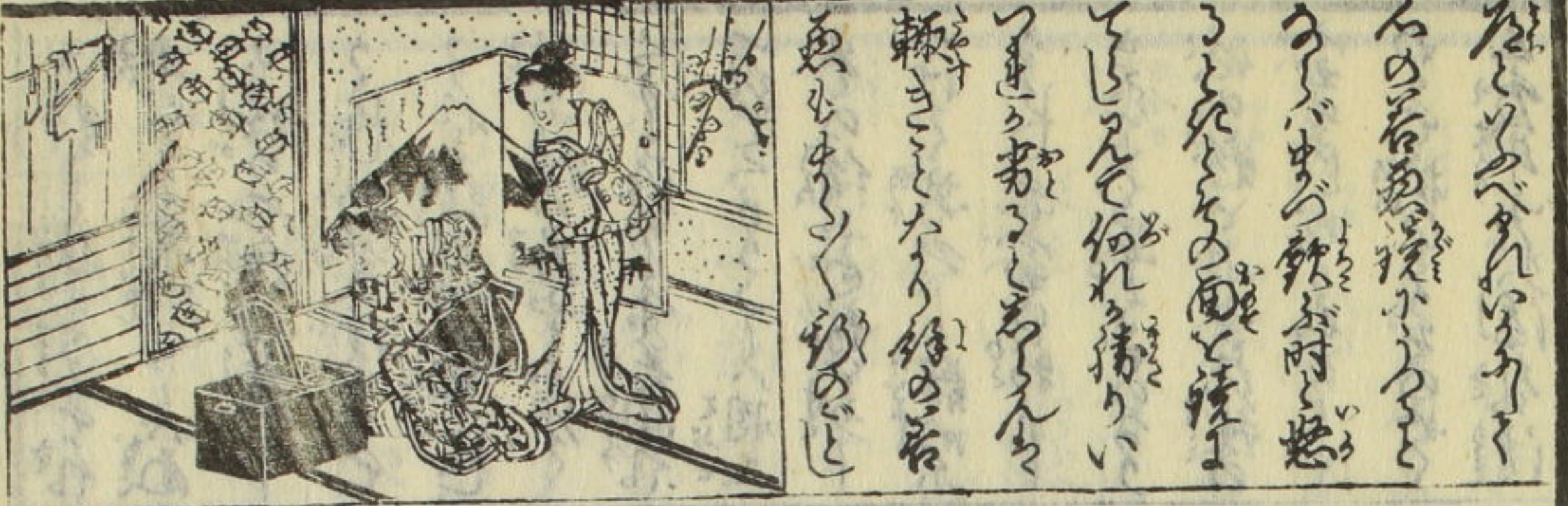
くると井の中  
は又何おれはは  
ての水と扱はる  
是も茶もさるる  
用はくま  
一寛小おれ  
年につまはる  
強打とくは夜  
張とつとくま  
多たれはくま  
一井の水はく

立子多しして家の内静  
たつとくは夜  
云ぬく誤り  
少れはくま  
らび心の内小憐  
俄と固く前て



婦女たるは州  
 女の如く用ふる御夜多  
 きの中は鏡とて身と  
 るは一鏡の方物とめり  
 うふ様とて一書もかかひ  
 ことほこの書をもよそ  
 ち業帝の時小あひま  
 舟明とて神代も傳り  
 てと持の針袋牙とて  
 至たふ人の書懸とて  
 向ううらぬとて人の  
 容貌のしりへは書  
 ちれいふともまうし  
 んに侍少あつたのあれ  
 ばはうしりも書ゆふ  
 んかこころいふる女の

はふべしと書い  
 子わくは材を借ひて  
 但我もよ入る家とて用  
 小をまぬりの小指も  
 ふべしと書  
 一丸婦人の心根の悪し



なすべしと書い  
 んの書懸とて  
 うふ様の時とて  
 うとてその書とて  
 てしを何れとて  
 つまらぬとて  
 頼まことなる御の書  
 ぬるまうしとて

病をわくは  
 恨むと人と侍と物姑と  
 智恵満きとて  
 十人よ七八は必わの  
 婦人の男に及ぶ  
 不たより自願戒と改め

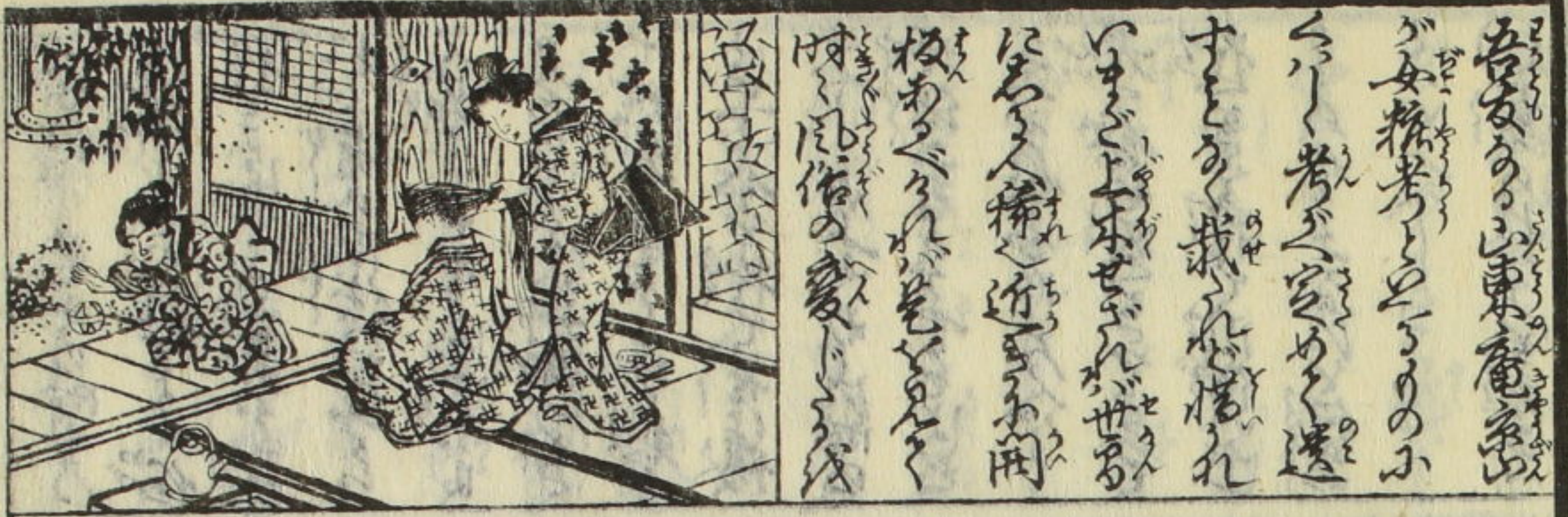






○ 養甲の格并（かたがた）すれ及（およ）しりる（しり）是（こゝろ）もや  
 けふはたはじあつてあつて  
 わふゆゑも信平らあ  
 板のせその上よりあつて  
 年らうあつて板のあひその  
 よろし押（お）しとくおべ  
 ○ 女中（にやうちゆう）のそらむじ  
 より、裁（き）らうらうをあん  
 果（は）てわをうらじとあま  
 の汚田（けつでん）掃（は）つ洗（せん）小（こ）掃（は）  
 くの女の九（く）掃（は）とのそら  
 形（かたち）ゆる（ゆる）とらむも  
 是（こゝろ）す（す）其（その）法（は）をう（う）  
 かうらうらうの法（は）を  
 是（こゝろ）もあつてう（う）のあ

ゆの道（みち）疎（そ）まれてこれ（こゝろ）家（か）身（み）  
 の仇（あいつ）とらあつてこととあつては  
 その夫（おとこ）とく清（きよ）後（ご）子（こ）と育（そだ）  
 身（み）でも毫（あひ）も溺（おが）れく智（ち）りせ  
 悪（わる）く切（き）悪（わる）なる（なる）あ（あ）何（なに）  
 事（こと）も我（わが）身（み）と強（つよ）く丈（さか）よ



道（みち）へ一（ひと）直（ち）の法（は）小（こ）女（に）子（し）紙（し）  
 産（う）ま三日（さんじつ）床（とこ）の下（した）小（こ）脚（あし）しむ  
 りとく、つと是（こゝろ）も男（おとこ）の丈（さか）母（はは）  
 娘（むすめ）女（に）を比（ひ）よ家（か）身（み）なる（なる）弟（あに）  
 のよふつとてとも丈（さか）の丈（さか）立（た）  
 家（か）身（み）と強（つよ）く我（わが）身（み）なる（なる）













〇徳白粉小精粗りて  
 眞白粉と別れぬ  
 〇用ゑしとれとて  
 小粉とす火のよた  
 くとたふふとて  
 〇徳白粉小精粗りて  
 眞白粉と別れぬ  
 〇用ゑしとれとて  
 小粉とす火のよた  
 くとたふふとて

女大

蔵より女子れ親と  
 人の理と知る人  
 ありて

女大 終

三考雜書之世相 中本 近前

女庭訓又倭書 既出入 大本

女大學榮文庫 日大本

女消息往來 日大本

春玉百人一首始文庫 女今月入 原大本

嘉永五年奉亥秋八月穀旦訂正

江戸書肆

栄久堂 山本平右持

三都妖婦傳 中本 既入 讀本

女用文袖倪 後雲堂主人生等 中本

永花百人一首文十抄 既出 經抄 寸紙本

町かやちを角



